外面に引きのばした粘土板を貼付けた痕跡が窺えるものがあり、62は、焼成前（たぶん自重で基底部が縮んだ折）に外表面が接合面から剥離している。器面の調整は、外面が斜または縦方向の刷毛目、内面が斜方向の撫でである。基底部の下端部は、製作の過程で自重のため変形するところから、48・61では、内外に張出した粘土を指ではさんだ痕跡が部分的に遺り、65～67では、内面を指で強くおさえ、外面を横撫でつけている。

灰褐色・黄褐色・赤褐色または茶褐色の埴質のものが全体の七割を占め、赤褐色ないし茶褐色の硬質のもの二割弱、須恵質のものが一割強を数える。破片全体が一様に埴質あるいは硬質のものが多いが、一片の中が質の異なる焼成を示すものも少なくない。たとえば、硬質の部分と須恵質の部分とが混在したり、器肉の芯の部分は灰色の須恵質であるが内外面は褐色系の硬質のものなどである。

68は、埴輪円筒片に、先の鋭った工具で綾杉文を刻む。

朝顔形埴輪（第16図69～71）

朝顔形埴輪と確認できるものは、わずかに口頸部八片で、全形は明らかでない。69・70は、大きく外反する口縁部で、外面は斜刷毛、内面は斜撫でつけの上に横刷毛を施こし、端部を横撫でする。71は、肩から頸部の破片で、外面は斜刷毛の後、頸根部に突帯を繞らし、内面は、肩部に撫で、頸部に一部乱れた斜刷毛を施こす。これらの断面の曲率からすると、肩は余り張らず、口縁部と頸部との境は、突帯が繞るのであろうが、曲率を極端に変えるものではなさそうである。円筒と同じく、埴質が多いが、70一片のみは、硬質ないし須恵質である。

（笠野　毅）

山辺道上陵鳥居改修工事箇所調査

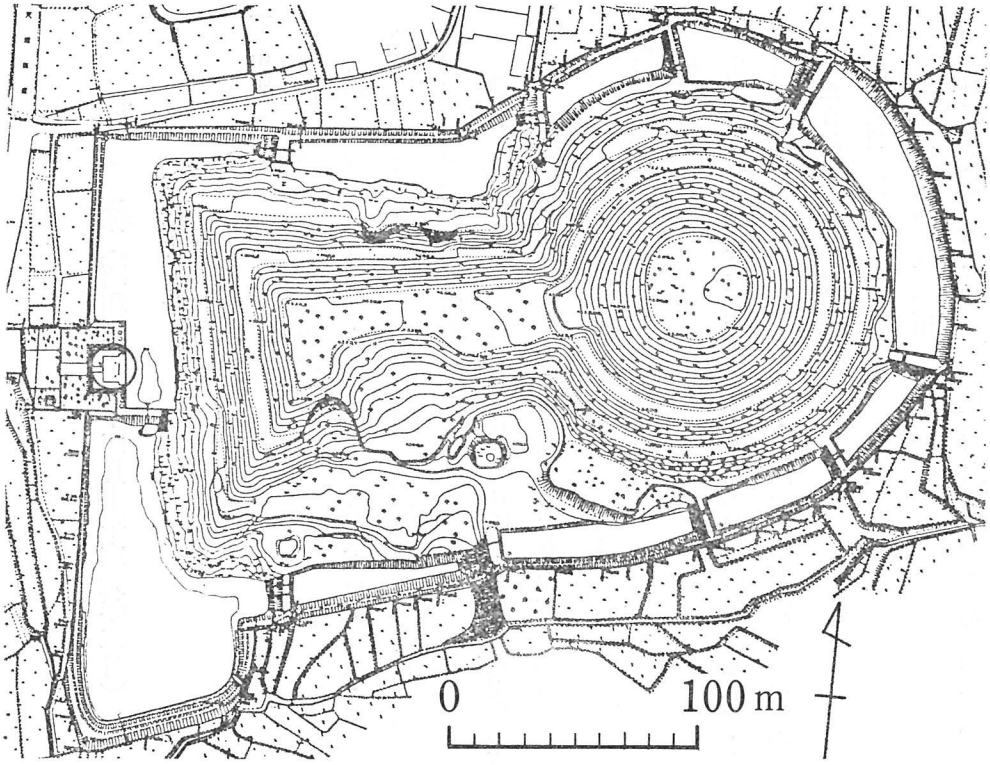
景行天皇山辺道上陵の鳥居老朽による建替え工事に伴い、昭和六十三年十一月二十二日から平成元年三月一日まで立会調査を実施した。

掘削は在来鳥居の基礎と同一箇所（第16図）を各々一・五メートル四方で、一・六メートルの深さまで行った。基礎内の土相は現地表下〇・六メートルまでが黄褐色の砂質粘土層、それ以下が青灰色粘土層であった。掘削が進むに従い現地表下約一五センチから在来鳥居の胴木、五〇センチから旧鳥居の胴木があらわれ、さらに掘削床面から在来及び旧鳥居の礎石が検出された。これらのことから、基礎内の二層は在来鳥居建込みの際の基礎埋め戻し土とみられ、工事に支障はないので、予定どおり施工した。なお、北側基礎の上げ土中より土師器片一、土師質土器片一、陶器片一を採集したので、次に述べる。

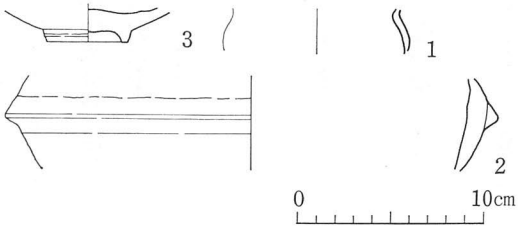
（池谷浩行・北田和夫）

土師器（第17図1）

坩と思われる。胴部の膨らみは弱く、頸部もあまり大きく開かない様である。全体に風化がひどく、調整痕は全く残っていない。



第16図　山辺道上陵調査箇所の位置（円内）（1/3000）



第17図　山辺道上陵の出土品（1/4）

土師質土器（第17図2）

焙烙と思われる。胴部は内傾しながら立ち上がる。外側に粘土を貼り付け、低い突帯を有する。底部はやや深めだったらしく、少々急な傾斜で丸味を有しながら下へ移行する。突帯の下側と内面の一部に横撫で痕が確認できる以外は風化のため調整痕は残っていない。

陶器（第17図3）

唐津焼の鉢か向付。低い高台部から大きく開きながら胴部へ移行するようである。高台内には削り出し成形の痕が残る。内外面とも乳白色の釉がかけられており、内面では蛇の目状を呈する。この蛇の目の無釉部分には重ね焼きの痕が残る。素地は赤灰色を呈する。

（佐藤利秀）